クリュッグ・ロゼの愉悦

「この世の中に、終わりのないものが２つある」

　女は、目の前にいる青い瞳の青年にフランス語でいった。青年は、椅子に座っている女の足元で、女を見上げていた。彼の瞳はどこまでも透き通っていて、青い鏡のようだった。

　女は、ヴェニスのサンマルコ広場の空に、同じ色をみたことがあった。あるいは、モルディヴの空も、同じような青だった、とおもった。いつでも好きなときに自分を受け入れてくれる透明な青。それでいて、この種のブルーの世界を一度知ってしまうと、もう戻れなくなる。そのように、一度つかまえられると逃げることができない力を、澄みきった青色は持っている。人間が、昔から大空や海原をみつめても飽きることがなかったように。

　女は、モルディヴでみた海や、ヴェニスの広場の開放された気分にひたっていたときのことをおもいだしていたが、モルディヴのときの女は18歳で、連れの男は40をすぎている富豪だったが、記憶のなかで、空や海の色は覚えていても自分と関係した相手の表情にはモザイクがかかっていて、いつのまにか記憶から消えていた。

　女はしばらくのあいだ、黙っていた。この世の中に２つだけある永遠について、なかなか続きを話さなかった。青年も静かに女をみつめつづけていた。

「日本だったら……」

　女は声にはださず、心のなかでつぶやいた。日本人男性だったら、こんなときにすぐに質問をするか、答えをだそうとする。

　青年は微笑みながら、目をそらすことなく女の素足にふれていた。その手は、身長同様にとても大きな手だった。けれども、大きい手ではあっても、雑な手ではなかった。青年は女の肌と、自分の指とのあいだの見えない絹を、指で愛撫するかのように、繊細に撫でていた。

　女も、さっきまで組んでいた脚をほどいた。自分の脚にふれている青年から視線をはなして、手の届くところにあったシャンパン・クーラーから、よく冷えたクリュッグ・ロゼのコルクを抜いた。大学生のアパートにも、シャンパングラスとそれを冷やすクーラーがあるところにフランスを感じていた。

「クリュッグは、シャンパンじゃない。クリュッグ・イズ・クリュッグ」

　かつて女にそういって、このシャンパンの愉悦をおしえたソムリエの恋人がいたものだったけれど、女の記憶のなかではその男も、顔にはモザイクがかかっている。けれど、ソムリエの恋人が教えてくれたワインやシャンパンにまつわる話と、その彼と当時飲んだお酒の味は、今でも女の生活に残っている。

「ねえ、シャンパンの泡はね、グラスの内側の傷に反応してできるって話もあるのよ……」

　女は、クリュッグ・ロゼをシャンパングラスに注ぎながら、目の前でひざまづいて自分をみあげている青年に話しかけた。そうして、こんな青年の内側にも、傷はあるんだろうか、とかんがえていたがそれより、この星の泡をのみたかった。

「乾杯」

　女が日本語で言うと、青年はくすぐられたような可愛げな笑顔をみせて、「カンパイ」と日本語で返事をした。それから女は、あしもとの青年のほうをみなかった。口のなかにはいっていった星の泡は、他のシャンパーニュのように刺激的ではなく、どこまでも優しい味がした。それはさきほど歩いていた秋のリュクサンブール公園の風だった。

　そしてシャンパングラスに唇を重ねるごとに、いつか聞いたクリュッグの逸話をおもいだす。

「クリュッグの祖先はフランス人ではなかったから。ドイツ人だったんだね。けれど、フランスを愛する気持ち、シャンパーニュにかける情熱は誰にも負けなかった。クリュッグ一族は、４代目になるまで自分の畑をもたなかったが、その必要もなかったんだ。なぜなら、クリュッグの最大の魅力と秘密は、舌にあったから。自分だけを頼りに、あらゆる畑のブドウを混ぜ合わせるアンサンブラージュを極めていたからなんだよ」

　女の体温は、シャンパンの微酔も手伝っていたのか、なだらかに高まっているみたいだった。ドイツ人だったクリュッグが、その舌だけで選り抜きのぶどうをそろえてつくった、シャンパーニュのなかのシャンパーニュ。女はなぜか、はじめてラムネを飲んだときの、少女時代に戻っていたりした。

　そのあいだ、女はこの部屋の青年の存在をまったく忘れていたわけではなく、青年はもはや女の体温装置になっていた。これもまた日本の青年とはちがう、と女は満足したまま、シャンパンの微酔に身をゆだねていると、一口ごとにみえてくる景色がちがって、それが愉悦の正体だった。

　女は年に数回だけ、日本を脱出して海外に滞在する。その貴重な休息は、女を自分が日本人であることを忘れさせてくれて、無国籍な“女”に戻ることができた。

　資産を動かす自立した社会人としての義務も、立場上は東京のオフィスにこもっていなければならない状況からも逃げることができて、女としての自分をたのしめた。

　青年と女は知り合ってまだ数時間もたっていない。彼は、リュクサンブール公園のベンチでフランス語版の源氏物語を読んでいた。ソルボンヌで日本語を勉強しているそうだ。

「日本の女性はうつくしいけれど……あなたはまるで藤壺のようにうつくしい」

　青年が女に声をかけたのが、今回のはじまりだった。

　二人は磁石のNとSが引きよせられる自然法則のごとく、寄り添って公園を散歩したまま、リュクサンブール公園をでて、サンジェルマン大通りにでた。その通りの酒屋のまえで、女は青年を待たせておいて、自分でシャンパンと赤ワインをそれぞれ１本ずつ買った。それから、オルセー美術館のちかくにある青年のアパートへむかったのだった。

　そして、女は椅子に座って、さきほどのあいだ、女の２本の脚のあいだにひざまずいている青年を眺めつつ、“クリュッグ・ロゼ”を飲んでいたのだったが、いつしか青年は立ち上がって、その曇ることがない爽やかな表情で、グラスに最後の一滴を注ぎながら、フランス語でいった。

Le temps passé tres vite quand je suisavec toi.

　女はクリュッグのラスト・ドロップをのみおえた。青年も猫がそうするように、舌で自分の唇まわりを入念になめまわしながら言った。
　Votre gout est（あなたの味がある）

「これが日本だったら……」

　と、またしても心の中で呟いていたのは、これが日本だったら最近の“草食”とかいう男子の多くは、いまごろ洗面所にでも姿を消して、口をすすいだりしているのかもしれない。

　時間はまだ夕刻にさしかかる前で、パリの陽はどこまでも高いところにあった。窓からみえるセーヌ河は絶景だったが、青年はおもむろにたちあがり、カーテンをしめにいった。カーテン

が閉まると、部屋は真っ暗になった。青年はテーブルのうえに蝋燭をもってきて、火を灯した。

　セーヌ河がみえる昼のパリもすばらしいが、夜のパリへと変貌する洋室もいいな、と女はおもって、心なしか、穏やかな金髪の微笑青年が、闇と蝋燭の火によって、眠りから目覚めた獣のようにみえてくるのが女には期待通りだった。

　青年は蝋燭をもってくるときに、いつのまにかアコーディオンも取ってきていて、今度は女の２本の脚のあいだにひざまずくのではなくて、椅子にすわった。ちょうど二人の目と目が90度になり、テーブルの下で自然に二人の脚がからまってしまう位置に座って、アコーディオンを弾いた。

　それは女がリクエストしたわけでもなかったが、ちょうど女が聴きたかった「April in Paris」だった。

　蝋燭の光がゆらめいて、アコーディオンの音色に耳をかたむけていた女は、いつのまにか時間の感覚というものがなくなってきて、いまが昼か夜か朝かも忘れてしまって陶酔がはじまっていた。青年は女の前で、「ボンヌ・マール」を抜いている。

「エレガントな……きみのようにエレガントな赤だよ」

　青年はそういって、ワインを注いで、テーブルから数歩しかないところにあるキッチンへ向った。女は、ほろほろと頭のなかにまわる微酔のまなざしで、ほおづえをついて青年をみつめていたが、まもなく、ハーヴやガーリックの香り、焼けたバター特有のこうばしい匂いが女の鼻を刺激すると、それは女の食欲を過剰なまでにかきたてていった。青年は、大量のエスカルゴを、オーヴンでバター焼きしていたのだ。

Bon appetit !

　青年の運んできた殻つきのエスカルゴと、ボンヌマールの芳香な香りが女に迫ってきていた。青年は今度は椅子に座った女のとなりに寄り添うように立ちつくしたまま、熱くなったエスカルゴの殻をトングでおさえ、細いフォークで殻の内部の肉を荒々しくむきだしては、エシャロット色にそまったバターソースをからめて、女の口元にはこんでいった。

　さっきまで、女の足元にひざまずいていた純情な青年が、いまはペットに首輪をつけて紐でつないでいる主人のような表情をみせていた。そして青年からエスカルゴを口にいれられていた女は、エスカルゴを最後まで噛み切ることなく、途中で飲みこんでいったが、そのヌラヌラした物体は、女の喉を内側から愛撫している青年の指のようだった。

　青年もさきほどと同じように席について、赤ワインのグラスを手にとった。そして、ブルーの瞳を輝かせて、語りはじめた。彼は、日本語を使える喜びに浸っていた。

「ぼくはこのエスカルゴをマルシェ・ラスパイユで昨日、買ってきたんだ。ぼくはちょうど大学の食堂で源氏物語の『藤壺』の項をよみながらおもっていた。もし、光源氏の初恋である『藤壺』みたいな日本人女性に会えることができるなら、ぼくは自分のエスカルゴ料理を食べてもらいたい……そして、ぼくはちかいうちにぼくの藤壺に会えるような気がしていた」

　青年は話をつづけた。

「ラスパイユ市場で売っているエスカルゴは、極上なんだ。それは……ぼくの田舎の父親が育てているんだよ……身がひきしまった最高のエスカルゴを、生きたまま一週間、エサをあたえない。そうして、体内の汚物をすべて吐き出させてから一度煮るんだ……」

　女は、青年の語りを黙ってきいていた。女は青年の名前を知らなかったし、青年も、女の私生活についてなにひとつ訊ねていなかった。せいぜい青年がソルボンヌに通う大学生で、源氏物語が好きだということと、子供のころから実家でエスカルゴをみてきたスペシャリストだということ、そして、その指も舌もエスカルゴみたいだということ。それくらいしか知らなかったが、それだけ知っていれば十分な気もした。

　女は、いずれこの青年の顔も、澄みきったブルーの瞳も、これまでの情事の相手とおなじく記憶から消えていくことになるだろうとおもった。けれども、今食べているエスカルゴの味は、これからの女の人生において幾度もおもい返されることになるだろう、とおもった。

　ひきつづき、青年が食べさせてくれるエスカルゴを喉で味わいながら、ワイングラスのなかの「ボンヌ・マール」に口をつけてみると、はじめは繊細で、ちっぽけにおもえていた赤ワインが、秒単位で濃く深く成熟していた。いまでは、口のなかの濃厚なエスカルゴバターをのみこんでゆく豊かなワインになっていた。